

園の実践事例紹介～「科学する心」を育てる～

いのちを感じる／社会福祉法人ウエル清光会 仁川ウエル保育園（兵庫県）

子どもたちが日々の生活で出会う「小さな生きものたち」。園ではどのように向き合っているのでしょうか。

生きもの好きな子どもたちの、虫たちとの共生を考えた取り組みと、小さな生きもののいのちを感じる心の成長をとらえた実践をご紹介します。



● バグホテルって何？作ってみようよ！／3,4,5歳児

🍀 なんでここにはいっぱいいるの？

虫を見つけると捕まえ、「はなファミリーのペットにしたらいいっちゃう？」と話していたが、次第に「狭いところいやだと思う」「御飯がないよ」「おうちに帰りたと思うな」といろいろな思いを伝え合っていた。

虫を逃がす際、同じ昆虫でも違う場所に住んでいることに気付いた子どもたちは、「なんでここがいいのかな？」と不思議に思い始めた。

「あっちはあんまり日が当たらず、涼しくていいのかな？」

「確かに！暑いところいややもんな～」

「コオロギって何食べるんやろ」



それから子どもたちは畑や散歩に出かけると、「ここも涼しいしなんか住んでるかもよ!」と、いろんな場所に目を向け、「虫のおうち探し」を楽しむようになっていた。

🍀 バグホテル？おもしろそう！

虫のおうちを探す中で、やはり『捕まえたい』『飼いたい』という思いと、『生き物がかわいそう』『逃がしてあげないと』という意見に葛藤を感じている子どももいた。

そういった思いも含め、生き物への興味関心が高まってきていることを感じ、バグホテルを紹介した。

初めは不思議そうに話を聞いていた子どもたちだったが、虫や生き物が来てくれるかもしれないということに、「やってみよう!」と興味を持ち、さっそく5歳児2名が設計図を描きはじめた。

そんな二人の様子を見て、『なんかおもしろそう』と感じたのか、周りの子どもも集まり始め、話に参加し始めた。

自分たちで考えておうち作りをするという今までしたことのない遊びに、子どもたちの“わくわくする気持ち”が一気に高まっていった。





土の部屋もいいね！



このぼろぼろの木もよさそう！

部屋の数や形が決まると、部屋の中に置くものの相談が始まった。

「葉っぱがおうちやねんて」
「木もあったらいいよね」

自分たちが好きな虫が来てくれるには、何を置けばよいか話し合っていた。

🍀 この棚めっちゃいいやん！

ある施設でいらなくなった棚を園庭に運び込み、子どもたちの目の付くところに置いておくと、「なにこれ？」「もしかしてバグホテル？」と嬉しそうに見に来る姿があった。外で放置されていた棚だったので、木がめくれているたり泥が付いているところがあったが、それを見た子どもたちからは「この隙間にも何か来るんちゃう？」「もうクモが住んでる！」「バグホテルにピッタリなんや！」と、この棚がバグホテルになっていくことに期待を膨らませていた。



中はどんな感じかな？



あの木も使えるかな？



飾りつけされたバグホテル

🍀 小さくても生きてるんやで！

子どもたちは、何か虫が来ていないか、毎日の登園時や遊びの時間に見に行っては、バグホテルの様子を気にしている。サークルタイムでは決まって誰かが「今日はバグホテルにアリが来てた」と伝えたり、散歩に行くと「この木バグホテルに良さそうちゃう？」「持って帰って入れるわ」と変わらず興味が続いている。

バグホテルが完成して終わりではなく、『虫が来てくれるには』と子どもたちなりに考え、虫が集まる工夫をしながら継続して楽しんでいる。

「なんかここに実がいっぱい落ちてるで」「誰かが集めてるんかな」「置いといてあげよう」「あ！ここ見て。穴が開いてる～」「ほんまや！なんか住んでるんちゃう？」

子どもたちは自然の中の発見に“いのち”を感じている。他のクラスの子どもが捕まえたバッタを持って「このバッタ、バグホテルに入れたら？」と声をかけられることもあったが、「捕まえて入れたらかわいそうやん。僕たちとっしょで生きてるんやで」と伝える5歳児の姿もあり、小さいいのちを自分たちと同じように捉えられるようになってきているのだと感じた。

📎 考察

虫探しの中で、虫を捕まえることを「かわいそう」「逃がしてあげよう」と言う子どもと、虫が生きられる環境を作り大切にして虫を飼いたい子どもという、生き物が好きな子どもたちの葛藤が感じられた。子どもたちは、自分の感覚や気持ちを小さな生き物に重ね合わせることを楽しみ始め、命への興味が生まれた。バグホテルづくりに向けて、いろんな生き物を調べたり想像したりすることを楽しんだからこそ、「いのちを感じる眼」が子どもたちの中に育ってきていると感じていた。